

春秋会

ニュースレター

2023.2



今月の予定

- ・2/3(金) 広報 「阪堺電車貸切」
- ・2/13(月) 18時 スーツ着こなし研修
- ・2/20(月) 19時 副会長当選祝賀会・新人歓迎会(75期)
- ・2/21(火) 12時 幹事会

今月のニュースレターも豪華なラインナップでお届けします。
皆さまからのご意見・ご感想など、広報委員一同楽しみにしています。

古典芸能よもやま話

～落語について(5)

中村 和洋(49期)

1 法律家と落語

春秋会のニュースレターにふさわしい話題として、弁護士や裁判に関係する落語がないかなど、考えてみました。

有名な大岡裁きの「三方一両損」のほか、「佐々木政談」、「天狗裁き」、「帯久」など、裁判にまつわる面白い落語はいくつかあります。

弁護士に相当する仕事は、江戸時代は「公事師(くじし)」、明治時代は「代言人」といったそうですが、調べた限りでは、それらを題材にした落語は見当たらず。

私人がトラブルに介入するという意味では、桂米朝が掘り起こした「算段の平兵衛」という落語があります。

これは、どんなもめ事、厄介ごとでも知恵を働かせてうまくおさめる「算段の平兵衛」という男が主人公。

その平兵衛がお金に困った末に、人を巻き込んで色々画策するのですが、殺人事件を誤魔化したり、お金をだまし取ったりするととても悪い奴。弁護士というよりは、反社の事件屋。

この場に似つかわしくないのも、もっとお気楽な噺として、弁護士に類似する仕事ということから「代書屋」を取り上げます。

2 代書屋のあらすじ

代書屋というのは、本人の代理で書類の代筆を行う仕事で、今でいう司法書士か行政書士。

ただ、昔は字の書けない人が多かったので、お上に提出する書類だけでなく、履歴書や手紙の代筆も請け負っていたそうです。

「儲かった日も代書屋の同じ顔」という川柳があるそうで、代書屋という商売は、儲かったとしても、あまり嬉しそうな顔をしてる人はいない。弁護士も同じですね。

ある日、代書屋に一人の男が訪ねてきて・・・。

男「おたく代書屋はんでんなあ？あれ書いてくれるか？紙の上に字、書くやつ」

代「大抵、紙の上に字、書きまんねん……」

男「履歴書ちゅうのん持って来い、言われたんだ。家にないさかいに、隣りの人に借りにいったら、また親切な人でな。家中探してくれて、仏壇の引

2022 年度 広報委員

- ・堀川 智子 (57 期、委員長)
- ・西原 和彦 (55 期、担当副幹事長)
- ・有村 とく子 (50 期)
- ・中森 俊久 (55 期)
- ・山口 昌之 (58 期)
- ・浦 寛幸 (59 期)
- ・広瀬 元太郎 (60 期)
- ・柳 勝久 (61 期)
- ・山田 寛子 (65 期)
- ・金 星姫 (66 期)
- ・木場 晶子 (67 期)
- ・田村 瞳 (67 期)
- ・板崎 遼 (67 期)
- ・吉留 慧 (68 期)
- ・高 一成 (69 期)
- ・根本 俊太郎 (70 期)
- ・佐久間 ひろみ (71 期)
- ・足立 敦史 (71 期)
- ・村本 健司 (71 期)
- ・河野 哲平 (71 期)
- ・才木 晴幹 (72 期)
- ・中岡 さつき (72 期)
- ・久井 大輝 (73 期)
- ・山本 こずえ (73 期)
- ・佐々木 崇人 (74 期)
- ・神澤 鈴子 (74 期)
- ・秦 尚輝 (74 期)

き出しまでひっくり返して見てくれたけどおまへん。『確か終戦まではあった。ひよっとしたら空襲で焼けたかも……』と」

代「そんなアホなこと……。履歴書を隣りへ借りに行く人おますかい」

男「人に聞いたら、代書屋へ行きなはれと」。

代「書かしていただきます。すると、どこぞへ就職でも？」

男「いや？そんなことしまへん。……勤めに行きまんねん」

代「それを就職言いまんねん。まず最初、本籍は？」

男「大阪の日本橋」

代「『大阪市浪速区日本橋』」

男「三丁目」

代「『三丁目』」

男「二十六番地」

代「『二十六番地』」

男「風呂屋の向かい」

代「そんなもん、どおでもよろし。それから現住所。おんなじ？『右に同じ。』

それから名前は？」

男「田中彦ジロウ」

代「田中彦……、ああこの彦ジロウのジという字は次ぐという字ですか？

それとも治めるという字ですか？」

男「あんたにお任せします」

代「任したらいかん、あんたの名前やがな。生年月日は？」

男「生年月日は……、あれ確か、なかったんだ。」

代「無茶言うたらいかん。生年月日のない人がおますかいな。生まれた年月を言いまんねん」

男「そんなこと言うたら、歳が分かる」

代「分かるよおに載せまんねや」

男「さよか、こら辛いなあ。いえ、わたい歳のこと聞かれんのが一番辛い。実はあんた、うちの嫁にかて、歳二つ誤魔化してまんねや。ホンマは一つ下だんねんけど、一つ上ということに。この際、どっちの歳？」

代「どっちの歳て、本当の歳を言うてもらわな」

男「さよか、辛いなあ……。御大典（注：昭和天皇即位の礼のこと）おましたやろ。あの晩に、提灯行列出ましたやろ。あの時、わたい初めて若いもの仲間入りさしてもろたんだ。揃いの法被を着せてもろて、鉢巻き締めて提灯に灯ともして、ア、ヨイトサノコラコラ、チョイトチョイト、ドッコイサノ……（踊り出す）」

代「店で踊ったらあかん……。筆振り回すさかい、そこら墨だらげや。それで、年月は？」

男「昭和三年十一月十日。」

代「昭和三年……。今、昭和三十五年だっせ。あんた、どうみても四十は超えてる。えらい若いなあ」

男「そら、提灯行列の年」

代「誰がそんなこと聞いてまんねん。今年幾つ？」

男「恥ずかしながら、数えの五十」

代「ええ歳して、そんなアホなこと言うてなはるなあ。生まれた日は？」
男「秋の彼岸の中日の明けの日」
代「そんなおかしい覚え方、しなはんな。学歴は？」
男「ガクレキねえ……。大根のキムチのことやなあ」
代「そら、カクテキやがな。学歴というたら学校のこと」
男「なんや、学校なら学校とはじめから言いなはれ。ガクレキで、英語使
て……。もう、学校は行ってしまへん」
代「そらそうや。あんた今年五十や。昔行ってた学校を尋ねてまんねん」
男「それやったら、小学校」
代「何という小学校」
男「尋常という小学校」
代「分からん人やなあ。『本籍地内小学校、卒』。……あんたこれ、卒業しな
はったやろなあ？」
男「そらもお。二年で卒業」
代「……『中途退学』」
男「(上機嫌に) そない言うたら体裁がええ」
代「(あきれて) それから、職歴。あんたが今までやってきた商売、仕事、そ
れを初めから終いまで言うて」
男「みな言わなあきまへんの？一番最初にやったんは……。提灯行列の明
けの年」
代「何でも提灯行列や。すると昭和四年ですな。何をやんなはった？」
男「わたいの友達がな『巴焼きの機械があいてるさかい使えへんか』言う
て貸してくれた。今の回転焼きの機械。ところがあんたえらい緑青吹いて
錆付いて。で、ペーパー買おてきて、錆をバアーツと取んのに、丸二日か
かって……」
代「そんな余計なこと言いなはんな。場所はどこです？」
男「玉造の駅前。三軒ずつ向かい合わせで六軒並んだ、東側の真ん中の
家。確か家賃が七円五十銭」
代「家賃はよろしいわ。『玉造の駅前において、和菓子商を営む。』これは
いつ頃まで？」
男「やろと思たけど家賃が高いので止めた」
代「(不機嫌に)……『一行抹消』。判をこっち貸しなはれ、判。消印が要り
まんねん。あのねえ、思ったことやなしに本当にやったこと」
男「その年の十二月に夜店出しを」
代「『露店営業人として』。品物は何です？」
男「ヘリドメを売ったんで」
代「着物の襟を止める襟止め？」
男「いや、ヘリドメ」
代「何です、それ？」
男「あんた知りまへんか。下駄の歯の裏へ打つゴム」
代「あれ、減り止めてですか。長年代書屋やってこんなん書いたことな
い……。『履き物付属品を販売す』と。これはいつ頃まで？」

男「品物並べてな。ところが、十二月でっしょろ、冷たい風がビュービュー吹いてくるしな、人は一人も通らへんし、ちっとも売れんへんさかい、二時間でやめた」

代「(ますます不機嫌に)・・・『一行抹消』。判をこっち貸しなはれ。あのねえ、あんたの本職は何です？」

男「わたの本職はガタロだんねん」

代「何でんねん、そのガタロて？」

男「胸のどこまでのゴムの靴履きまんねん。ほんで、川の中へザブザブ〜ッと入っていきまっしょろ、ほで金網でな、川底をゴソ〜ッとすくてきてな、中から鉄骨の折れたやつやら、釘の曲がったのん選ってるやつおまっしょろ。」

代「あれガタロ言いまんのん・・・『ガタ』・・・、こんなもんいよいよ書きよおがないわ。」

男「(得意げに)どおでっしょろ『ガタロ商を営む』と」

代「(あきれて)ガタロ商？。え〜『河川に、埋没したる、廃品を回収して、生計を立つ』と。こないしときまひよか」

男「(嬉しそうに)そおいう具合に書いてもろたら、この商売がぐっと引き立つ。『生計を立つ』て、スーツと立ってるとこなんか気持ちがあえわ。どおでっしょろ、その根元に巴焼きと減り止めと、あしらおか」

代「そんなもんあしらう人、おますかい。」

男「それからね、昭和十年十月十日」

代「そおいう具合に言うてもらうと、書き良い。『昭和十年十月十日』。場所は？」

男「大阪の飛田でんねん」

代「『西成区山王町において』と。で、これ品物は何です？」

男「(恥ずかしそうに)いえ、こらわいと松っちゃんが初めて女郎屋へ」

代「(怒って)どこぞの世界に、そんなこと履歴書に書く人おますか？」

男「そない言うけど、これぐらいのことちよっとは書かんと、読むもんがオモロない」

代「こんなもん面白がって書くもんやおまへん。(イライラしながら)『一行抹消』」

男「へえ、判はここに」

代「喜んでんねやないで、ホンマに・・・」

～代書屋という落語でございました。ドンドン(下座の太鼓の音)

3 噺のポイント

三代目桂春団治が得意としていた演目で、真面目くさった代書屋の演技がリアルで、とてもおかしかったです。

ほかには桂枝雀も得意としていました。男の商売がポン菓子屋さんで、商売の説明のときに、大声で「ポーーーーンッ」と叫ぶときの面白さが格別。

その桂枝雀による笑いの分析として「緊張の緩和」というキーワードがあります。緊張が緩和したときに、人は笑うのだとのこと。例えば、お葬式の大事な場面で、偉そうにしたお坊さんがスツテンと転んでしまうとか。

この「代書屋」も、真面目な職業の典型である「代書屋」が翻弄される様が「緊張の緩和」を生んでいます。

また、代書屋のように、うまいサゲ(オチともいいます)がない落語の場合、途中で切り上げて「『・・・』というお話でございます。」で終わる形があります。「らくだ」なんかもそうですね。

今回は、そういう「代書屋」という落語のお話でございました(うまいサゲが思いつきませんでした・・・)。

つづく



※引用写真(©公益社団法人上方落語協会)は、三代目桂春団治。高座で羽織をスマートに脱ぐ姿が粹でした。とても女性にモテたそうで、米朝が「三代目は遊びを控えて、もっと落語に集中したらええのに」と言ったそうですが、そういった遊びの中から、あの独特の柔らかい雰囲気が生まれたのかもしれない。

お茶のお点前をしにモンゴルまで行きましたー前編

小橋るり(51期)



◆3年前からお茶を習ってしまして(裏千家),お師匠である宮脇史歩先生から今回の日本・モンゴル友好茶会への同行を誘われました。冬のモンゴル(ウランバートル)でお茶を点てるのは二度とない好機と受け止め,師匠のお申し出を有難くお受けしました。ウランバートルの気温は「最高」気温がマイナス15℃、最低気温がマイナス25℃くらい…。時差1時間,フライト時間は成田から直行便で5時間です。

◆2022年12月12日~13日(月~火)

明日からの茶会に備えて会場の下見と会場設営等に日本・モンゴルセンターに行きました。会場まで自動車で移動しました。寒いので30分以上も荷物をえっちらおっちらと持って歩くのはほぼ困難ということでした。車窓から見える景色は,ウランバートル市内の建物は旧ドイツ風やロシア風のものが多く感じました。



ウランバートル市内の建物



モンゴル・日本センター

◆2022年12月14日(水)～お茶会本番!



「和気満萬国」のお軸とゲルのデザインの香炉

史歩先生は日本から「和気満萬国」(読み方:わけばんこくにみつ)という、裏千家第15代家元の千玄室大宗匠ご染筆のお軸を日本からわざわざ持参されました。お軸の意味は「和やかな平和の空気, 気配が全ての国に満ちている」という願いをも込めたものです。外交樹立50周年記念友好茶会に相応しい内容です。世界の平和を祈念してこのお軸をお持ちになりました。茶席の亭主が、一番お客様らに伝えたいことを掛けるのがお軸です。正真正銘の亭主を務める史歩先生の説明を聞いて昨今の戦争状況に思いが行き、胸が詰まりました。

お棗(おなつめ:抹茶を入れる容器のこと)はモンゴルの満天の空に見立てた星のデザインが施されたもの、香炉はゲルの外観の置物です。こういった設えからモンゴルの来場者の方々に「友好」「平和」をお伝えしたのです。

在モンゴル日本大使ご夫妻, ダワードルジ・モンゴル日本人材開発センター所長そしてジクジット・元駐日モンゴル大使へのお点前披露を史歩先生がされました。続けて行われた茶道講座では来場されたモンゴルの方々に対して、私が!亭主役としてお点前デモンストレーションをし、史歩先生が日本語で茶道の精神や作法の紹介し、モンゴル国立大学日本学科教授のバトルが教授がキリル語で来場者にそれを通訳するというものでした。そのあとに、来場者に和菓子とお薄を呈しました。みなさん、本当にキラキラした瞳で呈茶に応えてくれました。言葉は通じませんが暖かく歓迎していただきました。

【在モンゴル日本国大使館 HP, 一般社団法人歩々佳風 HP も併せてご覧ください。美しい所作の史歩先生のお点前フォトが掲載されています。】



史歩先生とバトトルガ教授が茶道の精神やお点前について説明をされています。



風炉・運び・拝見なしというお点前です。



バトトルガ教授のお点前です

茶席が終わった後、沢山の人から一緒に写真を撮ってもいいかと言われました。ちょっと恥ずかしくも、嬉しくて…。こんな気分になるんですね。



このお茶会を実現するまでには、7月頃からの周到な準備が史歩先生と関係者の間でなされました。モンゴルの関係者の方々や史歩先生のこれまで積み上げた相互の信頼関係とお茶を通じた友好と平和の願いという結晶・賜物を体験した2日間でした。紙幅の関係で詳しく書けないのですが、もう大感激しました。

◆番外

@通貨のこと

モンゴルの通貨はツブルといって、紙幣が主な流通通貨でして、全部にチングス・ハーンが印刷されていて数字だけが異なるというものでして、滞在中、全く覚えられずでレジでカード決済以外ではトランプのババ抜きみたく全部の札を扇みたいに広げて店員の方に「選んで」取ってもらっていました。

(後編に続く)

今月の一曲 ~ Comme d'habitude (コム・ダビチュード) ~

青木 佳史(41期)

前世はきっとフランス人、いやパリの路地裏の猫か、もしかしてプロバンスの畑のフンコロガシだったかもしれないけど、とにかくフランスで生きていたはず、とわけもなく思い込んでいるのは、とにかくフランス語の響きが好きだから。京大教養部でフランス語選択の7組を志望

し、かの大橋保夫先生に半年間ただひたすら、「J e」（うじゅっ!）と「r」（うぐるっ）の発音だけを徹底的にたたき込まれた結果、フランス語修得の道におそれをなしてしまい、今では何を言っているかチンパンチンパンなのだが、フランス映画の会話やシャンソン（日本で言ういわゆる「シャンソン」に限らず文字通りフランス語の歌という意味で）を聴いているだけで、心は落ち着きうっとりとしてすやすやと眠りにつける。

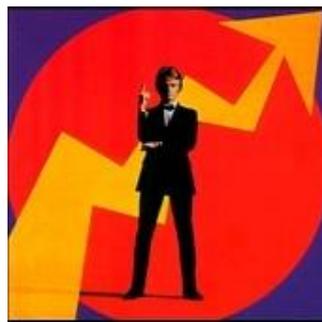
クレール・シュバリエさんが、ホジーニャ・ヂ・ヴァレンサさんのボサノバ風のギターにのって歌う「Comme d'habitude」（いつものように）に出会ったのは、たしか久しぶりに立ち寄った百万遍の「進々堂」だったはず。軽やかなリズムにフランス語でさりげなく歌われる曲に、自称元フランス人はすぐに魅了されてしまった。耳を澄ましていると、おやおや、このメロディは、F・シナトラのマイ・ウェイではないですか。



クレール・シュバリエ「Comme d'habitude」

<https://youtu.be/4E9jtawUnso>

シナトラが晩年（1969年）に歌い、後にプレスリーも歌ったことで、英米中心に世界的有名曲となったマイ・ウェイは、人生の成功者が、自らの人生をたどって、我が人生に悔いなし、と歌い上げる、まさに



アメリカンドリームの、日本なら高度経済成長を体現する代表曲だ。その原曲が1967年にフランスの人気男性歌手、クロード・フランソワさんが、人気女優フレンチ・ギャルとの別離を惜しんで歌ったシャンソンであることは意外と知られていない。いつものように起きても君は起きない、僕はいつものように独りで出かけ、いつものように君のいない家に戻り、君が戻るといつものようにキスを交わし仲良いように振る舞う・・・。「いつものように」を繰り返しながら、冷めていく二人の関係を暗示するという歌詞は、いかにもフランスらしいアンニュイに満ちている。

クロード・フランソワ「Comme d'habitude」

<https://youtu.be/qjprSREHXIY>

南仏にヴァカンスに来たポール・アンカがこれに目をつけ、全く違う歌詞をつけて新大陸に持ち込み、脂ののりきったシナトラに、我が人生を切り拓いてきた自負を正面から何の銜いもなく歌わせた。たちまち英米の白人層の心を掴み、イエスタデイに次いで世界で最もカバーされる曲（日本の訳詞では、自分の心に誠実に生きてきた人生を振り返る謙虚さに変わっているのも面白い）になった。



F・シナトラ「マイ・ウェイ」 <https://youtu.be/qQzdAsjWGPg>

こうしたシャンソンの佳曲を編曲・作詞してアメリカンスタンダードとなった曲は少なくない（「谷間に三つの鐘が鳴る」「好きにならずにいられない」「愛の賛歌」そして「枯葉」など）。いずれの変容にもフランスとアメリカの価値観の違いが如実に反映していて、比較文化論としても興味は尽きない。

自称元フランス人としては、クロード・フランソワの原詞の切なさをボッサのリズムで軽やかに描いたクレール・シュバリエさんのラテン的諦観に如くはない。そして、のちに荒廃した大英帝国から痛烈な皮肉を込めてシド・ヴィシャス（セックス・ピストルズのベーシスト）が叫べ「マイ・ウェイ」の勝ちも負けもないそれぞれの人生への悼みに共感したりする。



シド・ヴィシャス「My Way」 https://youtu.be/6MB_v3tyCEc

※ Comme d'habitude の原曲から古今東西のマイ・ウェイはこちらから。

<https://open.spotify.com/playlist/4u2oQxwMiOS9qdR4fekhr7?si=941a92b69c2648dc>

※ クレール・シュバリエさんの逸品「ブラジル風歌曲集」はこちらから。

https://open.spotify.com/album/6mRx5E2UQYcQu36RkYhCYB?si=3wIT1244TtqBRfx+4Z_GKA



執行部だより

副幹事長 西原 和彦 (55期)

飯島執行部も残すところあと2ヶ月ほどとなりました。

飯島執行部はオンライン (Zoom) を最大限活用して活動しているため (正副幹事長会議も幹事会もすべて Zoom 会議です)、結局、総会以外で執行部だけで全員集合することは今まで一度もありませんでした (唯一の機会となるべき11月に開催された正副幹事長および新旧嘱託の懇親会は、なんと飯島幹事長がコロナに感染しこれまた懇親会にオンライン参加されました)。しかしこの間、子供を出産したり、保育園に子供を送り迎えしたり、子供の中学校受験に対応したりと仕事だけでなくプライベートでも忙しい執行部員にとっては、負担が軽減され、非常に活動しやすいものでした。オンラインの利点・欠点はすでに明らかになっていますので、欠点を補いつつ利点を伸ばす利用方法を、コロナ後も続けることができれば素晴らしいな、と考えています。



ニュースレターの原稿大募集します

広報委員会といたしましては、このニュースレターを双方向的なものにしたいと思っており、皆様の原稿を大募集します。ぜひ、投稿ください。

- 1 今までのニュースレター・会報の記事に対するご意見
- 2 子育て体験談
- 3 変わった国に行った旅行記
- 4 ペットや趣味の紹介
- 5 感動した本、マンガ、ゲームの紹介

下記にお送りいただければ、ニュースレターに掲載させていただきます (もちろん、一定の審査はさせていただきますが…)

horikawa@lion-law.com